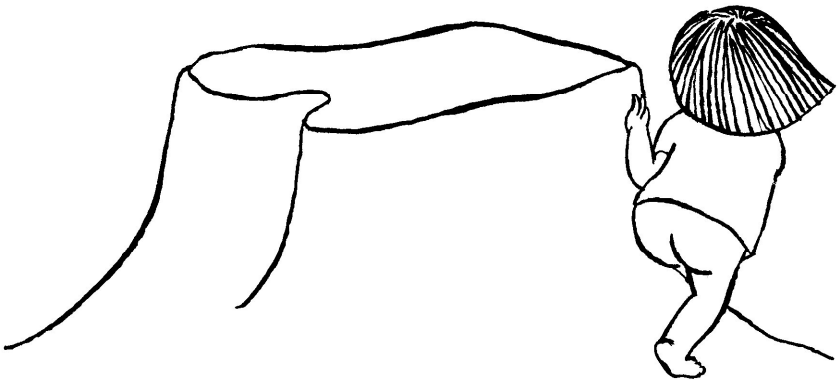
子が生まれる。こんな話をあえてすることも無いだろうから、こうして書き留めておこうと思う。

東京で暮らしていた頃、お酒を飲んで終電を逃したときなど、なるべく路上で寝るようにしていたことがある。ある時、大阪での講演会に参加した時も、新幹線の終電時刻に間に合わないだろうことは事前に予測が立っていたから、そうしようと決めていた。

ひとりで歩くのは初めての大阪で、まず食事の出来るところを探しながら、阪神大震災で被害の大きかったと言われる場所などを歩いた。洋食屋さんを一軒見つけてビールも飲んで、偶然見つけた銭湯に入った。

最初に浸かった湯船の隣の方は、同性愛者だったようだ。ほかの浴槽や洗い場を移る度に付いてきて、その仕草などで気づいた。

こう視線を感じるのも適わないの



Copyright　なんち屋　<http://doratomo.jp/~nancha>

で、浴槽を移る振りをして脱衣所へ逃げ込んだ。手早く着替えていると、それに気づいた彼もこちらへやってくるようだった。階段を駆け下りて外へ飛び出すと、後ろで階段をバタバタと下りてくる人の音が聴こえた。同性愛を否定する気はないし、見るからに体格のよい彼をしても、簡単に手篭めにされることは無いだろう。彼にその気があったかも分からないが、さっと路地へ入ってその時やっと、息をついた。

土地勘は無いが、大体の駅の方角はわかっている。もう一本別の大きな道路へ出てゆっくり歩き始めたら、路地との交差点から自転車を引く彼が現れた。そこからはずっと、後ろに彼がいた。コンビニに入ったり道を間違えた振りをしているうちに、とうとう歩道橋であきらめたようだった。露骨に引き返すことが出来なかったのだろう。上からこちらを見ていた。

新大阪駅までしばらくの間に、いく

Copyright　なんち屋　<http://doratomo.jp/~nancha>

つものコンビニで同じ雑誌を立ち読みした。駅横のバス停で寝ることにした。しかし朝まで、ほんの小さな物音にも目が覚めてしまい、辺りを見回しては横になるを繰り返した。新幹線に乗り込むまでほとんど眠れなかった。

なぜこんなことをしていたかと言うと、その年の冬から、ネパール・カトマンドゥ付近の街なかで、いわゆるストリートチルドレンと呼ばれる子どもたちの支援活動に関わることになっていた。そのための勉強をしていた時、NGOや国際機関から発行された報告書やブックレットなどをよく読んでいた。そういったものの中で強く取り上げられ、よく触れられていたのは警察官らによる恐喝や暴行、また大人たちによる性的いやがらせ、強姦まがいの行為による子どもたちの肉体的、精神的被害についてだった。

訝しい報告だと思った。というのは、

Copyright　なんち屋　<http://doratomo.jp/~nancha>

僕はそれまでに、子どもたちが路上などの屋外で眠っている姿を写真でいくつも見ていた。何人もが寄り集まって布団も無く、折り重なるようにして顔だけ出ているような子もいる。単純に「楽しそうじゃないか」と思った。この小動物たちの様子にある種のときめきを感じたものだった。こんな顔つきで恐怖の夜を過ごせるのだろうか。

それで自分でも試してみようと思ったのだ。連夜になることは無かったが、しばらく続けてみてそれなりに合点がいくこともあった。

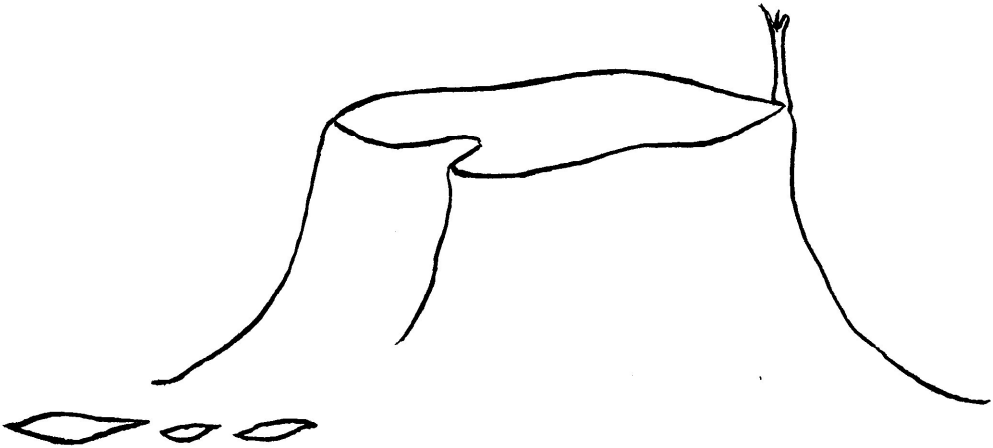
ネパールに滞在したのは二〇〇四年十一月中旬から二〇〇五年二月初旬まで。後半の一ヶ月ほどは、正確にはカトマンドゥ市ではなくパタン市の街なかで、換金できるごみを集めている子どもたちに、支援活動とはまったく別にほぼ毎日会っていた。

あるごみ集積所を拠点にしている十

Copyright　なんち屋　<http://doratomo.jp/~nancha>

四、五歳くらいまでの男の子たちで、彼らはグループになって仕事をしている。八時半くらいに街のごみ回収車が来るまで代わり番こに、あるいはみんなでこの場所で過ごし、寒さしのぎに火をおこしてあたっていた。その火でペットボトルを破裂させたり、お金にならないプラスティックを溶かして遊んだりもしていた。みんな大抵いつもサンダルで、足の指先を怪我してぐじゅぐじゅになっているのも放ったらかしだった。捨てられたものの中に食べられそうなお菓子があれば、それはそのまま食べた。朝のひと仕事が終わるまで朝食をとらない習慣で、朝一から働いているから、よくお腹を空かせていた。

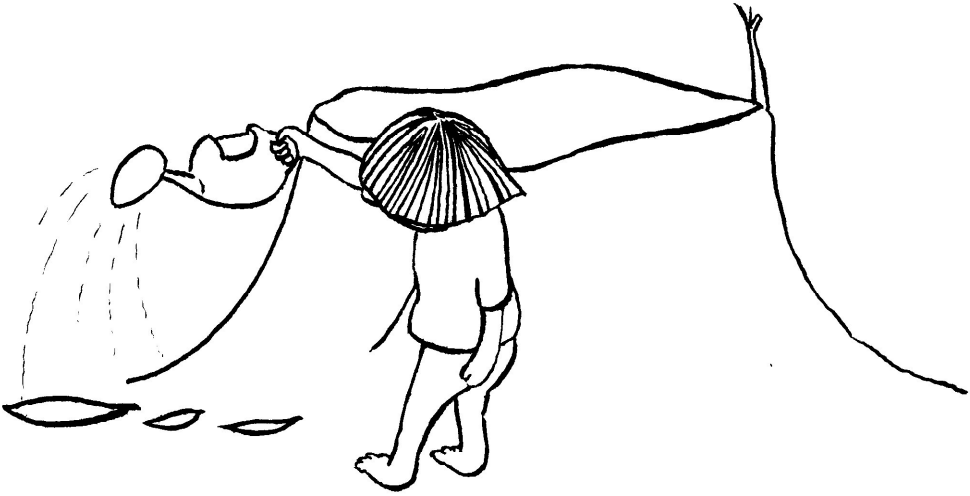
　彼らは最後にはごみの分別所へ持って行き、午後換金する。中には一人、別の目的でグループに加わっている子もいるのだが、僕は平日の朝は出勤時間までただこの火にあたりに来るという



Copyright　なんち屋　<http://doratomo.jp/~nancha>

具合で過ごし、たまにお茶をおごってやったりして、週末には彼らの家に行くこともあった。僕は「ツァール」と呼ばれていた。おそらく《sir》が転化したものだろうと思う。9人ほどの子とはかなりの顔馴染みにもなった。

ある日の夜、仕事帰りに歩いていると、よく歩く道沿いのドーナツ菓子の喫茶店の前に子どもらが集まって、やかましく声を立てていた。歩道からガラス越しに、中の客か店員に残りをねだっているのだろうと思う。そのうちの一人が僕を見つけて、早速右手を差し出してきた。「金をくれ」ということだ。「まあまあ」みたいな顔ぶりでそのまま通り過ぎようとすると、その8人ばかりの子どもらの中に、毎朝親しくしているディペシュとディリプの兄弟がいるのにふと気がついた。僕が戻って二人に「よっ」と言うと、「ツァール！」と言ってディペシュが抱きついてきた。そのまま顔をうずめている。そ



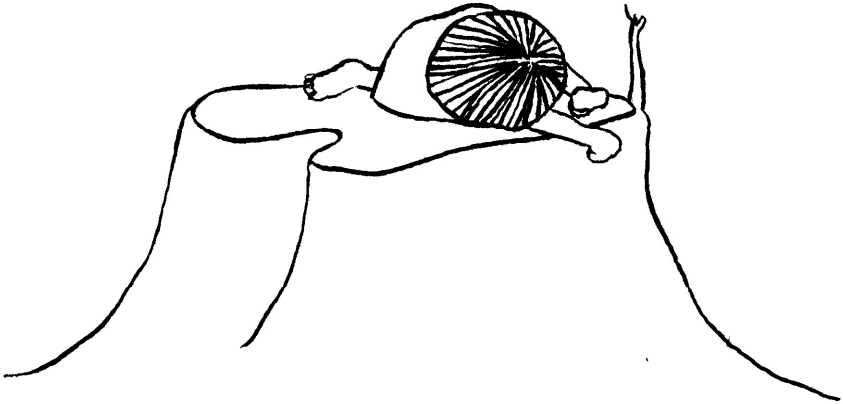
Copyright　なんち屋　<http://doratomo.jp/~nancha>

れを見た他の子らはそれ行けとばかりに手を差し出して群がってくる。するとディペシュは「ツァールにねだるんじゃねぇよ」とそれを追い返した。意外な展開だった。

彼の肩をたたいてその場を離れると、後ろで「誰のツァールよ?」といった話をしているのが聴こえてきた。

ある朝は、ごみ集積所に7人が集まっていた。その日は僕が手土産にクッキーを持ってきていて、火に向かいながらみんなで食べていた。すると緑色のジャージばかりをよく着ているクリシュナが突然、天に向かって声高らかに女性器の名を叫んだ。身体を仰け反って手を広げている。

こいつは以前、ネパール語での体の部分の呼び名を教えてもらいながらスケッチブックに書き込んでいる時、男性器名を口の部分だと信じ込ませようとしたことがある。ほかの子が苦笑い



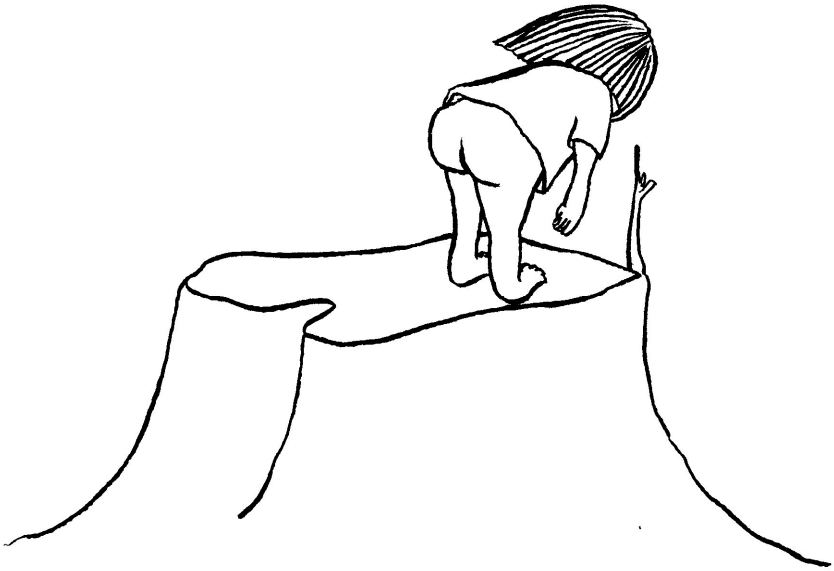
Copyright　なんち屋　<http://doratomo.jp/~nancha>

して首を振ったので発覚した。この朝もあんまり可笑しくて大声で笑ってしまった。その後も卑猥な動きを続けている。

女学生風の子も歩いている、一般の通行者の目もある、普段の朝である。僕が「こらっ」と顔を覗き込むと、さすがにぶったたかれると思ったのだろう、彼は手で顔を覆うようにして身を屈めた。でも僕にそんな気が無いことが分かると、また近寄ってきて、やはり抱きついてきた。

彼らは、自らの経験から、一般の人々に自分たちがどのように見られているかをよく知っている。やさしく接してこようとも、その見方を乗り越えていないことはすぐ見抜く。思い込みから一線を引く。基本的に憐れみのまなざしなど求めてはいない。むしろ、ストリートチルドレンだから何だと言うのだ、と虚仮にされたい。

家まで付いて行きたいと初めて申し

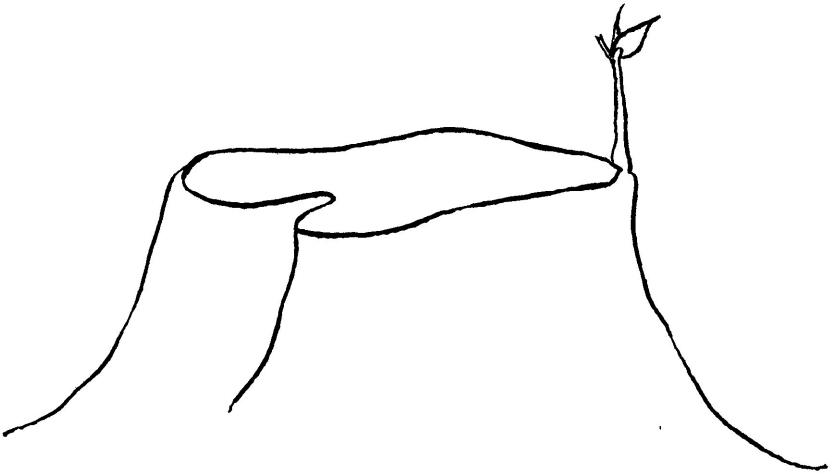


Copyright　なんち屋　<http://doratomo.jp/~nancha>

出た時には、彼らはなんと歓喜した。「僕らの家に行くんでしょう?」「僕らの家へ行こう」と繰り返した。また、ネパール滞在が終わりに近づいた頃、初めて一眼レフを下げて彼らのところへ行くと、僕の首からこの一眼レフを奪い、自分たちの姿にシャッターを押した。名札を楽々と乗り越える。本当はへっちゃらだと、狂喜して教えてくれる。フィルム2本分、へったくそな写真ばかりで、それも愉快だった。

事故がきっかけで、言葉は「マイマイマイ」と繰り返すことしか出来なくなったおばあちゃんがいた。しかしそのことを自覚し、記憶も失っておらず、意識のはっきりとした人だった。そんなおばあちゃんにその後出会った。

親がだまされて大きな借金を抱えたことのあるやつとも仲良くなった。彼自身には何の罪も無いことだが、実叔母からこの挿話をたびたび罵られてき



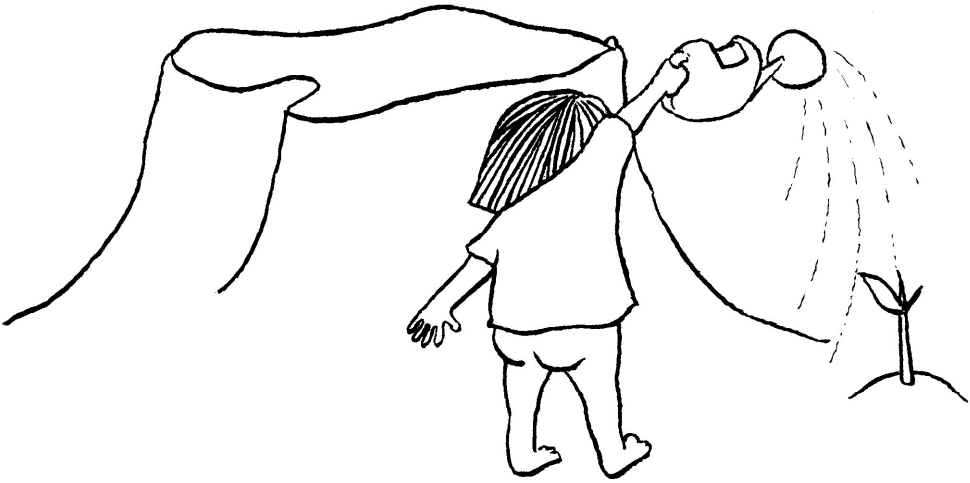
Copyright　なんち屋　<http://doratomo.jp/~nancha>

ているようだ。すでに引きこもりの経験もある彼は、その叔母さんと面会することが決まっただけでも落ち着かなくなり、目前では恐怖で身体が硬直していた。

辛そうにしている人にもいろいろ出会ってきたが、彼らの苦痛はどんなものだろうか。きっとパタンの街でごみを集める子どもらに相通すると思う。みんな元気にやっているだろうか。

自分に理解の出来ない生き方をしている人に恐怖したり、後ろめたく感じたり、理解できないという事実に苛々したり、それを他人のせいにして罵るようなことは決してしたくない。それはもはや悪意だ。分からなければ「あいつはそんなやつだ」と済ませられるような人間でありたい。

我が子だと決め付けるようなことはなるべくしたくない。自由に育ってほしい。



Copyright　なんち屋　<http://doratomo.jp/~nancha>